

越谷市郷土研究会

第434回 史跡めぐり

平成25年1月3日 (木)

『新宿・山の手七福神めぐり』

前から読んでも、後ろから読んでも、同じ文句 (回文) かいぶん

《五・七・五・七・七》

ぶねの
よきかな
のり
をとの
み
な

ながきよの
ねぶり
のみなめ
とをの
め



宝 船

七福神の起こり→家康と天海僧正との問答

仁王経にんのうきょうの七難即滅そくめつ・七福即生そくせい→七福神の誕生

歴史的事実

室町終わり、禅宗の影響、七福神の原形できる

布袋和尚、寿老人、福祿寿

江戸の中頃、七福神を乗せた宝船かいぶん（回文付き）

『ながかきよの とをのねふりの

みなさめさめ なみのりふねの

おとのよきかな』

（長き夜の 唐の眠りの 皆目ざめ

波乗り船の 音のよきかな）

正月二日は仕事始め、「お宝売り」

正月二日の夜に、宝船を枕の下にして寝る

「一富士、二鷹、三茄子」（初夢）

七福神めぐり→江戸の谷中で起こる

新宿・山の手七福神

“江戸時代の町名と歴史が残る神楽坂・大久保方面、

新宿山の手七福神コース（5.6キロ）平成25年1月3日（木）8:20 越谷駅東口集合
越谷駅（8:45、中目黒行）＝秋葉原駅（9:25着・乗り換え・JR切符配布 9:39発）＝飯田橋（JR線 9:46）
神楽坂（芸者新路）→善国寺（神楽坂の毘沙門様、石虎、明治の水準点）→牛込城跡（中世）・天文屋敷跡（江戸時代）→経王寺（大黒天）→宝録稲荷（はずれくじ供養）→巖島神社（弁財天）→永福寺（福祿寿）
→法善寺（寿老人）→古・鎌倉街道→鬼王神社（恵比寿・鬼の水鉢）→甲州街道（新宿通り）→太宗寺（布袋、江戸六地藏、切支丹灯籠）【13:00、現地解散】

・[帰途例] →新宿御苑駅（丸ノ内線）→大手町（半蔵門線）→越谷駅

神楽坂（神楽坂通りの北側）

毘沙門様で有名な善国寺が寛政四（一七九二）年の火事により、麴町から神楽坂へ移転してくると、武家屋敷だけであった神楽坂界限も、麴町より、よしず張りの店が九軒、この門前に移転するなど、除々に民家も増え、明治初期に神楽坂の花街も形成され、華やかな街になっていった。



明治の神楽坂 芸者新路（神楽坂より仲町通り入り左折）

神楽坂付近は、大正時代に隆盛を誇った花街で、飯田橋駅を背にした坂の右手に残る花街特有の路地は、日本でもここにしかないといわれている。また関東大震災以後は、日本橋・銀座方面より商人が流入し、夜店が盛んになった。「山の手銀座」と言われた時期はこの時で、坂沿いには商店街が立ち並び、瀬戸物屋・和菓子屋など和を思わせるお店が中心であった。表通りから一步入ると静かな路地があり、住宅街のなかにレストランや料亭などが多く見られる。

神楽坂は、全国的にも稀な逆転式一方通行となっており、自動車などの進行方向が午前と午後で逆転する。午前中は「坂上→坂下」（早稲田側から飯田橋側へ）であるが、午後は「坂上←坂下」となる。逆転式一方通行となった背景には、その昔、田中角栄が目白台の自宅から永田町に出勤し（午前）帰宅する際（午後）に便宜をはかったことに由来する。坂名の「神楽」の由来は、神楽に関するものではあるが、詳しくは諸説があつてよくわかっていない（最後の頁を参照）。

芸者新路の北側の本多横丁は、この横丁の東側全域が旗本本多家の屋敷跡地であった。

1. 善国寺（神楽坂の毘沙門さま）



善国寺の本尊「毘沙門天」

台石に明治の水準点記号



善国寺の虎の石造「石虎」



十二神将の寅（春日部市大枝の薬師堂）

毘沙門さま（加藤清正の守護仏と言われる）は寅年、寅の月、寅の日、寅の刻に生誕されたといわれ、正月・五月・九月の初寅の日にご開帳される。正面階段の中腹の左右に鎮座しているのは、江戸時代末期に彫刻された阿吽の虎の石像で、毘沙門様の寅の生誕に因んでいる。

台石には、不の字に似た、イギリス式測量の明治初年の凡号（きごう）水準点が刻まれている。かつては道路沿いにあったものであろう。

都内で縁日に夜店を出すのはここが始まり（明治20年頃）で、それ以来「縁日の夜店」と言えば、神楽坂毘沙門天のことを指していたが、その後、浅草や他の地域でも夜店を出す寺社が増えていった。

藁店（わらだな）坂

藁を売る店があったために藁店坂と呼ばれた。また、この坂の上に光照寺があり、そこに子安地蔵が祀られていたことから別名、地蔵坂とも呼ばれた。

中世の牛込城跡

光照寺周辺一帯は、戦国時代にこの地域の領主であった牛込氏の居城があったところである。

牛込氏は、赤城山の麓、上野国（群馬県）勢多郡大胡（せたぐんおおご）の領主大胡氏を祖とし、天文年間に南関東に移り、北条氏の家臣となった。天文二十四年（1555）、姓を牛込氏と改めたが、天正十八年（1590）北条氏滅亡後は徳川家康に従い、牛込城は取り壊された。

天文（てんもん）屋敷跡（江戸時代）

ここ日本出版クラブ会館は、中世は牛込城の一部、江戸時代には、天文屋敷（「新暦調御用所」）が設けられ、天文観測がなされ、暦が作られた所である。

明和二年（1765）、当時使われていた宝暦暦の不備を正すため、設置された観測所である。渋川春海（^{はるみ}二世安井算哲）が天才的な頭脳を發揮して日本人による最初の暦となった貞享^{じょうきやう}暦を作り、これを改めたものが宝暦暦であるが、それをさらにここで修正したのである。



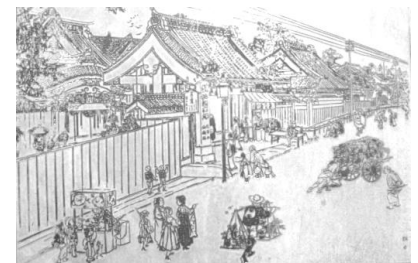
天文屋敷

袖擦（そですり）坂

すれ違う時に袖が擦れ合ってしまう程狭い坂というのが名前の由来である。坂の下には、江戸時代に馬に水を飲ませる為の水場があったそうである。

弁天坂

坂下に南蔵院境内に弁天堂があったことが由来である。昭和30年代まで、弁天を祀る池が残っていたそうである。



南蔵院と弁天坂

市谷小学校のレンガ塀

大正九年（1920）、当時としては珍しい木造三階建ての校舎とともに作られた。

焼餅坂（やきもちざか）

昔、この辺りに焼餅を売る店があったのでこの名がつけられたと言われる。昔はもっと急な坂で明治の市区改正で道幅が広がり、勾配も緩やかにした。

2. 経王寺（大黒天）

法華経は「お経の中の王様」と呼ばれることから名づけられた経王寺の名称は、日蓮宗（法華宗）のお寺の名前によくみられる。西日暮里にも大黒様を祀る同名の寺院がある。

この寺には、新宿区の文化財に指定されている大黒天を祀っている。微笑面ではなく、厳しいお顔をしている。火災が起きるたびに大黒天は難を逃れてきたので、「火伏せの大黒天」とも呼ばれる。

両脇には、日蓮宗ゆかりの、女神の七面大明神（しちめんたいみょうじん）と鬼子母神（きしもじん）が祀られている。

ほうろく 宝録稻荷神社

はずれくじを置いてお参りする「外れくじ供養」で知られる神社である。正月などは、外れくじを供養してもらい、次こそは是非とばかりに多くの人々が訪れると言う。

夏目坂通り

文豪夏目漱石の生家がこの坂の途上にあったことから、この名が命名された。

団子坂

昔この辺り一帯が低湿地で、この坂はいつも泥んこで、歩くたびに足下がまるで団子のようになったことから由来する。

大久保の犬小屋（余丁野小学校から）

江戸時代の綱吉の時に、抜け弁天から余丁町よちようまち小学校、出世稲荷にかけて見られた。

五代将軍徳川綱吉の「生類憐れみの令」によって生物の殺生を固く禁じた。特に綱吉が戌年生まれであったため、犬を重視し、江戸市中に野良犬があふれ、江戸市民は困り果てた。そこで野良犬を収容するため、中野（現、中野駅周辺）、四谷（四谷大木戸）・大久保に広大な犬小屋（犬御用屋敷）が設置されたのである。

ここ大久保の犬小屋には一時は約 10 万匹の犬が収容されたという。

3. 永福寺（福祿寿）

本堂前には、大日如来坐像と地藏菩薩の半跏趺坐（左脚を垂れ、右脚を曲げて腰かける）像が見られる。ここに三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）の庚申塔がある。

4. 巖島神社〔「抜け弁天」とも言う〕（弁財天）

抜弁天は、昔から境内地が南北に通り抜けができ、災難が抜ける御利益のあると言われる神社である。近くに旧鎌倉街道があり、平安時代の後三年の役で奥州に向かう

途中で源八幡太郎義家が戦勝を祈願し、奥州の鎮定ができて戻るときに、お礼に巖島神社を建てたという伝説がある。

この手洗石（元禄十六年二月）は、震災や戦災を受けながらも今日まで残ったものである。

5. 法善寺(寿老人)

境内には、タワシで洗うとその箇所が治るとされる「タワシ仏（ぼとけ）」とも呼ばれる浄行（じょうぎょう）菩薩像（必ず合掌している）がある。

西向（にしむき）天神社

西向天神社という名は、地形上、社殿が西方を向いていたからつけられた。

太田道灌の山吹の里（現在の新宿区山吹町の神田川に架かる面影橋あたり）伝説で知られた百姓の娘、紅皿碑（紅皿の墓と伝えられる板碑）が北端の駐車場内にある。太田道灌が鷹狩の際に雨にあい、蓑（みの）を借りようとした農家の若い娘です。

太田道灌は扇谷上杉家の家宰でした。ある日の事、道灌は鷹狩りにでかけて俄雨にあってしまい、みすぼらしい家かけこみました。道灌が「急な雨にあってしまった。蓑を貸してもらえぬか。」と声をかけると、思いもよらず年端もいかぬ少女が出てきたのです。そしてその少女が黙ってさしだしたのは、蓑ではなく山吹の花一輪でした。花の意味がわからぬ道灌は「花が欲しいのではない。」と怒り、雨の中を帰って行ったのです。その夜、道灌がこのことを語ると、近臣の一人が進み出て、「後拾遺集に醍醐天皇の皇子・中務卿兼明親王が詠まれたものに【七重八重花は咲けども山吹の（実）みのひとつだになきぞかなしき】という歌があります。その娘は蓑ひとつなき貧しさを山吹に例えたのではないのでしょうか。」といいました。驚いた道灌は己の不明を恥じ、この日を境にして歌道に精進するようになったといえます。（homepage3.nifty.com/youzantei/.../yamabukidensetu.html より抜粋）

山吹の里伝説は、埼玉県越生町、横浜市金沢区六浦（むつうら）、荒川区町屋などにもある。

鎌倉街道

鎌倉に通じると言う鎌倉街道が、西向天神社の下にある。そこには、かつて太宗寺の池から流れてくる俗称「カニ川」（蟹が住んでいる小川）が流れていた。

島崎藤村旧居跡

島崎藤村は小諸義塾を退職した後に上京して住んだ最初の地（明治38年）。三女、次女、長女と亡くしたが、ここで長編社会小説「破戒」を完成し、作家としての名声を不動のものとした。翌年、浅草区新片町に転居する。

6. 鬼王神社（恵比寿）

「鬼王」の名を持つ日本唯一の神社。鬼を春の神とみなし、節分の豆まきに、「福は内、鬼は内」と唱える。鬼とは鬼王権現のことで、月夜見命・大物主命・天手力男命をさす。



邪鬼の頭上に手水鉢をのせた珍しい水鉢(区指定文化財)がある。文政年間(1818～30)、毎夜水を浴びる音がするので持主が刀で切りつけたところ、その後家人に災難が相次いだため、天保4年(1833)鬼王神社に奉納されたという。

7. 太宗寺(布袋尊)

甲州街道の宿場である内藤新宿の中にあつたことから、多数の参詣者があり、門前町も発展した。

ここに、深川の地蔵坊正元が発願した江戸六地蔵の一つがある。表面には寄進者の名前がびっしりと刻まれている。六体あわせると72,000名以上に及ぶそうである。すると、この一体だけで1万を超す名前が刻まれていることになる。

第一番 品川寺 現存。宝永5年、旧東海道沿い。品川区南品川三丁目 5-17

第二番 東禅寺 現存。宝永7年、奥州街道沿い。台東区東浅草二丁目 12-13

第三番 太宗寺 現存。正徳2年、甲州街道沿い。新宿区新宿二丁目 9-2

第四番 眞性寺 現存。正徳4年、旧中山道沿い。豊島区巢鴨三丁目 21-21

第五番 霊巖寺 現存。享保2年、水戸街道沿い。江東区白河一丁目 3-32

第六番 永代寺 なし。享保5年、千葉海道沿い。明治初年の廃仏毀釈で取り壊された。

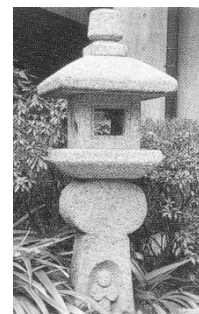


太宗寺の地蔵

キリシタン灯籠(織部型灯籠)

高遠藩の大名の内藤家墓所から織部型灯籠の竿部分(脚部)が出土した。現在の上部の笠・火袋部分は復元したもの。江戸中期の製作と推定されている。

織部型灯籠とは、安土桃山から江戸時代にかけての大名であり茶人でもある古田織部が好んだ形の灯籠で、一説に、全体の形状はTの形の十字架を、竿部の地蔵像の彫刻はマリア像を象徴しているといい、隠れ切支丹が信仰したとの俗信がある。



切支丹灯籠

【参考文献】

「江戸東京七福神めぐり」(日本出版社)

「新宿さまよい歩き9」(<http://asahi-net.jp/>)

「神楽坂」(ウィキペディア)

「毘沙門天善国寺」(<http://www.kagurazaka-bishamonten.com/>)

「新宿山ノ手七福神めぐり」(www.shinjuku7fukujin.net/)

その他、現地のさまざまな掲示板、案内板

★神楽坂の名前の由来(解説版より)

坂名の由来は、坂の途中にあつた高田八幡(穴八幡)の御旅所で神楽を奏したから、津久戸明神が移ってきた時、この坂で神楽を奏したから、若宮八幡の神楽が聞こえたから、この坂に赤城明神の神楽堂があたから等、いずれも神楽にちなんだ諸説がある。

七福神信仰

加藤幸一

〔七福神のおこり〕

將軍徳川家康が、天海僧正てんかいそうじょう（家康の信頼を受け、家康の政治を助ける。二代及び三代將軍にも仕える。日光東照宮を建てたり、上野の寛永寺を建てたりした。伝えでは数え年百八歳まで生きたという。）に、

「国がさかえるようになり、人徳がたかまるようにするには、どのような道が大切であろうか」

と質問されたのに対して天海僧正は、

「仁王経にんのうぎょうなどの經典に説かれている教えを大切にすれば、七難即滅し、七福即生せつきがいします。」

と答えた。（仁王経に「七難即滅、七福即生」の言葉がある）

さらに家康は、

「七福とは何か。」

天海僧正は、

「七福とは、寿命・有福・人望・清廉・威光・愛嬌・大量であります。」

と答え、この七つの福徳が人生にとって大切であることを説明した。

そこで家康は、早速、狩野派の画家に七福の神々を描かせた。

七福神は、七難を除き、七福を与える神々、つまり仁王経に説く「七難即滅、七福即生」の神々とされるようになった。七難とは、仁王経によると、日月の難・星宿の難・火災の難・水害の難・風害の難・早魃の難・戦乱盗賊の難の七つ。一方、七福とは、寿老神の寿命・大黒天の有福・恵比寿神の人望・布袋尊の清廉・毘沙門天の威光・弁財天の愛嬌・福祿寿の大量の七つである。

このように七福神の神々は家康と天海僧正の間答から生れたとの伝えがあるが、七種類の福神が民間信仰として現れてきたのは、それよりもずっと以前の室町時代終わり頃からと推定されている。

室町時代は禅宗が盛んで、その上、茶道の流行と相まって、洒脱な生活を好む気分が起こり、布袋和尚や仙人風の寿老人がもてはやされ、扇せん子・団扇うちわなどの絵に描かれるなどして、庶民の間に広まった。また、この頃、同類のものを集めて、名教的に物を教えることが流行しており、例えば寺院の格式として五山などと称し、禅宗寺院にても五老、七賢などというように名数的に並べる傾向があった。おそらくこれらのことが影響して、七福神の形態が確立され、絵画等に描かれるようになったものと思われる。

七福神巡りは、江戸時代中頃に、観音札所巡りや弘法大師札所巡りなどの巡拝の影響で、七福神信仰をもとに一定地域の七福神を祀る寺社の巡拝が始まったのである。

〔宝船〕

七福神は、最初、七福神を宝船に乗せた絵から一般に広まったと考えられている。初夢は、江戸では仕事始めの正月二日の夜に見る夢である。七福神に乗せた宝船の絵を正月二日、枕の下に入れて寝ると、一富士二鷹三茄子なすというように縁起のよい夢を見るといふことが盛んに行われるようになった。宝船のことを「お宝」といい、正月二日、お宝を江戸の町に売り歩く「お宝売り」の呼び声が町中に賑わったという。

この宝船の絵に

「なかきよの とをのねふりの みなめさめ
なみのりふねの おとのよきかな」

(長き夜の、唐の眠りの、皆目覚め、
波乗り船の、音の良きかな)

という五七七七七の短歌を書き添えている。

この短歌は、上から読んで、下から読んで
同じ文となる回文である。

聖徳太子の作との伝えがある。

〔七福神巡り(七福神詣で)〕

七福神めぐりとは、元日から七日頃まで、
その年の福運を祈って七福神を祀る神社や

寺院を巡拝することである。この七福神めぐりは、谷中(上野と本郷の間にある)の七福
神めぐりが最初と言われている。七福神めぐりが有名になったのは、隅田川の七福神めぐ
りで、これは文化元年(一八〇四)に向島百花園が開園されてから始まった。今と違っ
てたいした娯楽もなかった江戸時代のことですから、これがきっかけで、物見遊山を兼ね
た七福神めぐりが各地に始まり、文化文政年間(一八〇四〜一八二九)の頃から大いに盛
んとなった。

〔七福神の神々〕

寿老人(長寿の神様)

寿老人は、白髪長寿の老人の姿をして、杖を左手に持ち、杖には人の命を記した巻物を
吊るし、右手には団扇を持ち、鹿を伴っている。人に延命長寿の福徳を授ける神として信
仰されてきた。

鹿は長寿を司る寿老人の使いとされている。

大黒天(財宝や食糧の神様)

大黒天は、頭巾をかぶり、狩衣を着て、右手に打出の小槌を持ち、左手には左肩にかけ
た大きな袋をかつき、米俵の上を踏まえる。

小槌と袋は限らない財宝や食糧を蔵していることを表している。人々に財宝を授ける神
である。米俵に縁のあることから、鼠が大黒天の使いとなっている。初甲子(初大黒とも
いい子は鼠のこと)は、一月の最初に来る甲子の日をいい、大黒天の祭日となっている。

また、大黒は大国の音読みと同じとなるため、大黒天は大国主命と同一視され、恵比寿
は大国主命の子の事代主尊として、共に台所などに祭られ、民間信仰に浸透している。

恵比寿神(商売繁盛や航海安全の神様)

恵比寿は、顔は笑顔をみせ(これをエビス顔という)、烏帽子をかぶり、狩衣を着て、
右手に釣竿を持ち、左手に釣りあげた鯛を抱き、岩の上に座っている。三歳まで足が立た
ずに不具であったという。また、釣り好きな神様であるともいわれている。

最初は航海安全の神として信仰されてきたが、後に商売繁盛の神として広く信仰される
ようになる。釣り関係の人々の信仰も見られる。

一月十日が初恵比寿、「十日戎」ともい、兵庫県の西宮の恵比寿神社を中心として関
西に戎信仰が盛んで、商売繁盛を祝福して恵比寿を祀り、親類・知人を招いて祝宴を開



宝船

く恵比寿講が行われている。

布袋尊（清廉潔白・大氣度量の神様）

布袋尊は、大きな布の袋を持ち、大きな団扇を手にし、背は低い、腹を露出した太鼓腹（この腹を「布袋腹」ともいう）、粗末な衣服をまとい、常に笑顔を絶やさない、清廉潔白、大氣度量（おおよゆうなこと）を人々に授ける神として信仰され、禪面や置物にまでなつて親しまれている。

毘沙門天（勇氣や財宝の神様）

毘沙門天は、多聞天ともいい、甲冑をつけ、片手に宝塔を捧げ、もう片方には三つ又の鉾を持ち、怒りの相をなしている。毘沙門天は、上杉謙信（戦国時代の武将）が毘沙門天を守護神とするなど、古来、武将がよく信仰したもの。大和信貴山の毘沙門天や京都鞍馬山の毘沙門天は有名。

七福神の毘沙門天は、人に勇氣・決断力を与え、財福を与える神として信仰されてきた。弁財天（芸道音楽や財宝の神様）

弁財天（弁天様）は、七福神の中で唯一の女性の神で、白色の美顔、頭に宝冠、一般には青色の衣を着て、左手には琵琶を抱き、右手でこれを弾いている座像が多い。中には、腕が八本もあつて、それぞれの手には様々な武器を持つ。古来、安芸の宮島・近江の竹生島・相模の江ノ島の弁財天は有名。財宝を施す福神として信仰され、また、芸道音楽の仏神として位置づけられ、池・川・沼・湖などに中島を作つて、そこに祀られ、蛇が弁財天の使いとされてきた。

正月最初の巳の日を昔から「初巳」「初弁天」として、弁財天への参詣者が多い。巳成金という開運のお守りを授ける。

福祿寿（福と祿と寿を授ける神様）

福祿寿は、背が低く、頭が極めて長く、白髪童顔で、ひげが多く、巻物を結びつけた杖を右手に、脇には長命の鳥である鶴を従える。長命と円満な人格を授ける神。また、福（幸福）と祿（俸祿）と寿（長寿）を授ける神ともいえる。

〔七福神のおいたち〕

七福神の出身地は日本・中国・インドなど、生い立ちも性格もかなり違う、種々雑多な神々の寄せ集めといえる。

寿老神（中国の寿星の化身、一説には老子の化身とも）

寿老人は、もと中国の宋代、元祐年間（一〇八六〜九二二）の人と伝えられる。寿星（老人星ともいい、カノープスの中国名）の化身という。南極星の化身である福祿寿と似た性格を持ち、よく混同される。福祿寿と団体異名であるともいわれる。

また、一説には中国の老子（中国の道教を開いた人）の化身とも伝えられる。

大黒天（古代インドの神、一説には大黒主命）

大黒天信仰には二つの流れがある。一つはインド名をマハーカーラという仏神の大黒天、すなわち摩訶迦羅天で、これは多くは寺院に祀られている。もう一つは大黒天を実は大黒主命とする流れで、これは多くは神社に祀られている。中世、大黒天は大黒主命と音が似ていることから大黒主命と混同されたのである。

大黒信仰の流布に最も大きな役割を果たしたのは正月などに大黒の面や頭巾をかぶつて家々を訪れ、めでたい詞を唱えながら大黒舞を舞う門付け芸人であった。

惠比寿神（イザナギノミコトの第三子、一説には大国主命の子とも）
 惠比寿は、もと兵庫西宮の西宮惠比寿神社の祭神である。蛭子尊（イザナギノミコトの第三子）であるといわれる。また、一説には大国主命の子にあたる事代主尊であるともいわれる。

惠比寿信仰は、初め、漁業に関係する神として漁民の間で行われていたものが、後に都市や農山村に普及していったのである。鯛を釣り上げている姿となっているのは、漁民の間の信仰からきていることを物語っている。

農村では、大黒天と並べて惠比寿を祀り、福がくることを願い、都市では商売繁盛の神として商家などで戎講を行ったりしている。

布袋尊（中国の禪宗の僧侶、一説には弥勒菩薩の化身とも）

布袋尊は、中国唐代の契此という名の禪僧といわれる。杖と大きな袋を持って諸国をめぐり、喜捨（進んで施し物をする）を求め歩いたという。子供と遊び、楽天的な和尚として知られ、そこで世人は契此を弥勒菩薩の化身であるとして尊び、その円満の相は好画題として画像に描かれたり、彫刻や塑像に刻まれたりして、広く親しまれた。わが国では七福神の一人となり、禪画や置物としても親しまれている。

毘沙門天（古代インドの神）

毘沙門天は、古代インドの神で、インド名をバイスラバナという。仏教に取り入れられて、説法をよく聞くことから多聞天ともいう。多聞天は四天王の一つで、須弥山（仏教で世界の中心にあるという高山）の中腹にあつて、北方を守り、仏法を守護する仏神である。

弁財天（古代インドの神）

弁財天は、古代インドの神で、川の化身という。川の流れる音から音楽の神とも弁舌の神ともなる。文字からすると、弁財天の財は財宝を与えることをさし、弁財天ではなく弁才天と書かれたときは、弁才天の才が弁才（弁舌の才能）を与えることをさす。

なお、吉祥天と混同されたり、穀物の神である宇賀神と同一視されたりもする。

福祿寿（中国の南極星の化身）

福祿寿は、中国では南極星（南十字星）の化身といわれている。一説には中国宋代に実在した道士（道教を修めた人）であるともいわれている。

※参考にした主な資料 「深川七福神」（深川七福神会）、「大日本百科事典」（小学館）

作成日 昭和五八年一月十五日、改定版作成日 平成二十年十二月二十八日



寿老人



大黒天



惠比寿神



布袋尊



毘沙門天



弁財天



福祿寿



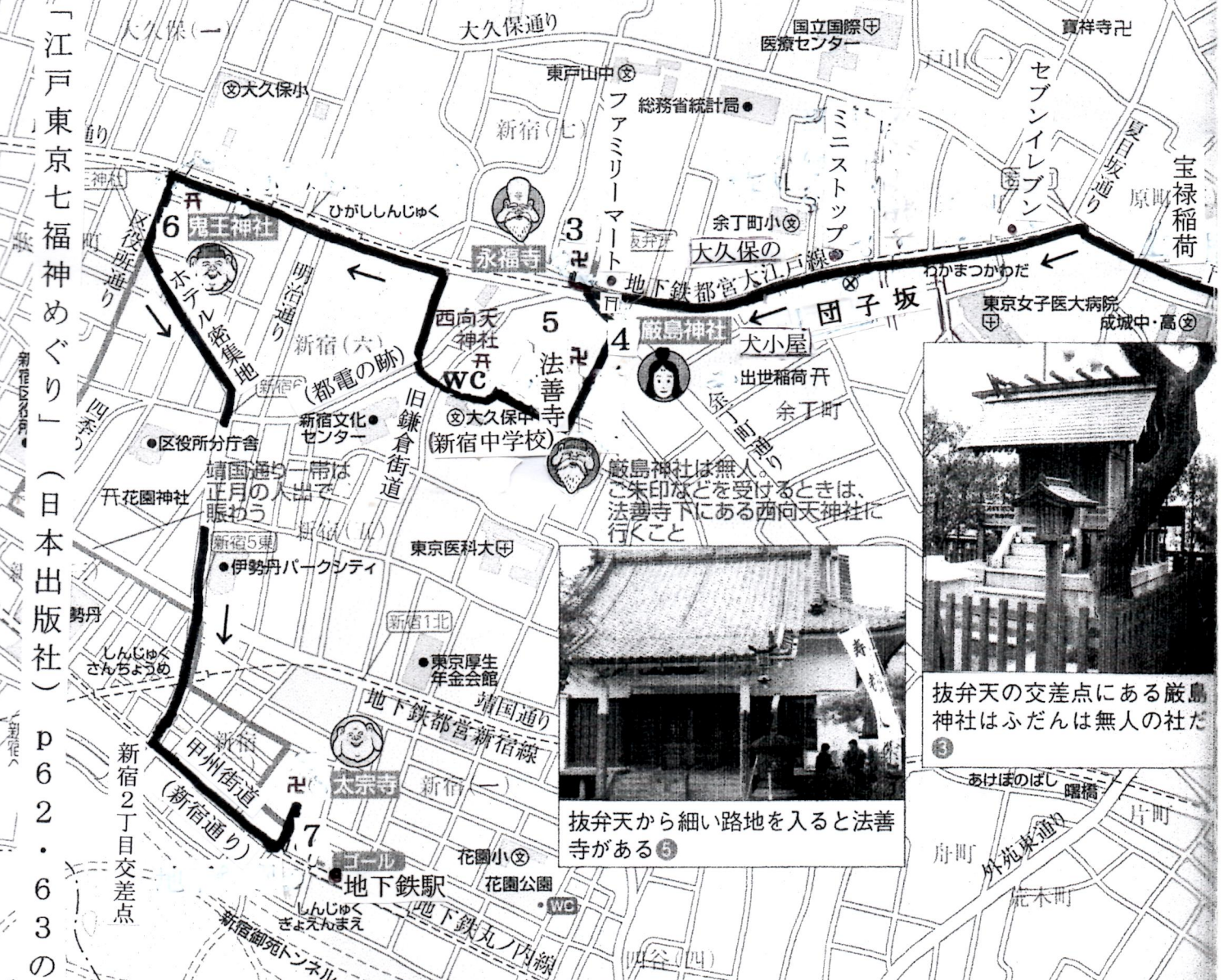
歌舞伎町のビルの谷間に鬼王神社はある ⑥



境内の社に福祿寿が祭ってある永福寺 ④



厳島神社のお札などは、ここ西向天神社で受けよう



「江戸東京七福神めぐり」(日本出版社) P62・63の地図を利用しました。

西向天神社 WC
 ⑤ 法善寺
 ④ 厳島神社
 厳島神社は無人。ご朱印などを受けるときは、法善寺下にある西向天神社に行くこと



抜弁天から細い路地を入ると法善寺がある ⑤



抜弁天の交差点にある厳島神社はふだんは無人の社だ ⑤



⑦ 新宿御苑にほど近い太宗寺。高遠藩ゆかり



外れくじの供養をしてくれる! 宝祿稲荷



こぢんまりとした経王寺だが祭られている大黒さまはとて立派でご利益がありそうだ②

桃を持つ雌雄の猿



こは立ち寄りません。

筑土八幡神社の「庚申塔」の特別紹介

雄（向かって右）雌の猿が互いに向かい合う
珍しい江戸初期の庚申塔



善国寺は徳川家康の時代から続く古刹だ①



牛込橋から市ヶ谷の堀を望む

